

データ アラカルト

Q：内容構成の「家庭と生活」を扱う単元では、どんな気付きを期待したらよいでしょうか？

A：自分の生活を見直そうという気付き

「家庭と生活」を扱う単元でも、印象的な授業があります。第16回の札幌地区研究大会のものです。1年生の「みんな大好き～自分パワーアップ大作戦」というタイトルの授業でした。

この時の授業者も学習指導要領を深く読み取りながら教材研究をされておりました。メスを入れたところは、目標の後半部分「規則正しく健康に気を付けて生活することができるようになる」という部分です。

これまでの「家庭と生活」にかかる単元は、自分が家族に支えられていること、自分にできることは何かを考え家族が喜ぶお手伝いをするところまでの学習が多く、自分の生活を見直し積極的な生活態度を育てるところまでの授業をしていなかったという反省からでした。

保護者からの事前の調査でも「我が子はお手伝いを喜んますが、自分の部屋の後片付けはしない、自分ひとりで朝起きてこないなど、自分自身のこととなると苦手である」という答えが返っていました。したがって、もっとも苦手とする自分自身への生活の振り返りをいかに楽しく、継続して出来るかをねらって単元構成を考えていったのです。

この活動の多くは、家庭を舞台とします。したがって、授業の成否は、学校と家庭との連携や保護者との情報交流が鍵となります。この時の授業者は、9月の授業公開に向けて、4月から学習参観日や懇談会、家庭訪問、保護者と交わす連絡帳、電話や手紙など、いろいろな手段を用いて保護者との信頼関係づくりに取り組み、ねらいに沿った授業ができるように保護者に働きかけていきました。

印象に残っている授業に共通していることは、授業者自身が「目の前にいる子どもたちを、今よりもっと良くしたいとか子どもの持つ可能性をもっと引き出したい」という熱い思いをもっていることでした。その熱い思いが、結果的には気付きの質を高めることにつながっていたのです。

よい気付きは、その子の思い願いが前提です。「やってみたい！」という思い願いが強いほど、より深い気付きになります。このことは、教師も同じです。教師の単元に対する思い願いが強いほど、よい学習になります。この単元でどんなことをしたいか？子どもにどんな力を付けたいか？教師の願いを強くもつことです。そして、もう一つ、教師自身も夢中になって「遊ぶ」ことです。「遊び心」がないと、生活科は楽しくありませんから。